

ギター及マンドリンの楽器としての史的考察

序言

ギター及マンドリンの起原を尋ねて同好家の参考に資したいとは豫て私の考へて居た處であつたが幸昨春ポーン氏文庫を譲り受けたので早速調査に着手した。先人がギターやマンドリンの起原に就いて記述したものは多くはメーヌやエンヂェルなどの著書を根據としたものであるから従つて期待した程の参考資料は得られなかつたが兎も角も一應の調査を終へたのは昨夏八月末日であつた。

然るに彼の震火災はポーン氏文庫を併せた武井文庫一切を烏有に歸すると同時に肝心の調査書迄も灰にして仕舞つた。誠に遺憾な事ではあるが止むを得ない。其處で再び出来るだけの参考書を集め尙前の調査の記憶をたどつて稿を起す事としたのである。

前の調査は大凡私の記憶に残つて居るのが幸ではあるが明確な年月や人名は想ひ

出すよすがもない。之が最残念な點である。然し其代りに時日の経過は前に脱漏して居た事柄を新に調査し得る便宜をも得た。結局出來上つたものは多少の缺點はあつても總體に前よりも稍詳細な記述をなし得た事を幸に思ふ。

私は獨のカール・エンゲル(Carl Engel)、英のトーマス・メース(Thomas Mace)、佛のルネ・ブランクール(René Brancour)、伊のベネデット・ランデイーニ(Benedetto Landini)、及ジューゼッペ・ブランツオリ(Giuseppe Branzoli)、獨のヘルマン・コムメル(Hermann Commer)等の説を主として調査した。而して此稿の爲に大沼哲、福岡陽道、高橋文雄、小西誠一、暹塚世六等の諸氏が多大の援助を與へられた事を特記して深甚の謝意を表する。

前編　ギター及マンドリンの遠き祖たる古代樂器

古代諸國がナイル河とチグリス、エウフラト兩河の流域を中心として興つた事は敢へて説くのを見ない。紀元前約三千年頃より既に國家的組織を有したエジプトを初めバビロニア、アッシリア、ギリシア、ヘブライ、ローマ、ペルシア等の諸國の樂器に就いてギター及マンドリンの遠き祖先を先づ尋ねて見なければ成らぬ。

古代樂器は大別して絃樂器、管樂器、擊樂器の三種に分つ事が出来る。此内管樂器と擊樂器とは直接ギターやマンドリンの起原に關係がないから之を省く。絃樂器は更に無桿屬と有桿屬との二種に分つ。而して前者は大體ハープ類、リラ類の二種に分れるが後者はリウート類の一種で盡きて居る事を知らねば成らない。

但し茲に一言して置かなければ成らないのは古代西洋樂器は多く未開な東洋人の有した單純な樂器を基としてそれを改善したものであるからギターやマンドリンの

最古い起原を尋ねるには當然溯つて東洋の古代樂器に及ばなければ成らぬ譯であるが當時の東洋樂器については單に記録が不完全であるばかりでなく事實樂器としては最幼稚なもので寧ろ樂器と云ふ名稱を與へるのも如何かと思はれる程度のものであるから私は古代西洋樂器から筆を起す次第である。唯讀者は古代西洋樂器が其基を東洋に發して居る事を知つて戴けばよい。

ハープ類は所謂立琴であつて大小種々ありエジプトのものが最も優れて居たらしい。プニ(Penn)と名付けられたものゝ如き即ちそれである。奏法形狀共に今日のハープと大差なく唯絃と平行に備へられる前柱が往古には無かつただけの相違である。之は絃の質や伸長の程度が變つたので必然的に起つた構造上の改善である。演奏には勿論兩手指が用ひられた。

リラ類は普通抱琴と譯される。U字形の支柱(實際は之が支柱であると共に響鳴胴である場合が多い)の上兩端を連絡する横柱からU字の底邊に數本の絃を張つた

もので之を左手で支へ右手指で奏し又は膝の脇で支へて兩手指で奏したのである。リラ類を最も多く用ひた國はギリシアで次にローマである。ギリシアの音樂に於て忘るべからざるは實にリラであつて彼の音樂の神アポロの表徴はリラであり、リラをもてるエラトの圖は屢々見る處である。(今日のLyricなる文字がLyraから生れた事は云ふ迄もあるまい)。

サルター(Psalter)は長目のリラである。大型のものをフォルミンクス(Phorminx)と云ふ。初期に於ては伴奏用として單獨に用ひられた。小型で下部に龜の甲又は木で作つた龜の甲型をもつたものをチェリス(Chelys)と云ふ。シタラ(Cithara)も其一であるが最注意すべきはキタラ(Kithara)である。キタラは下部方形で胸に當てゝ奏でられる。絃數は三本であつて大勢の若い男女が圓形に居並び中央に一人のキタラ奏者が座してコーラスの伴奏を務めた事が記録に残つて居る。多く伴奏の役目をもつて居たが然し紀元前七百年より以前に於て既に獨奏用としても用ひられたと

傳へられる。演奏には指及義甲が用ひられた。此キタラが後世ギターの名稱の語原となつたのである。

此リラ類はギターやマンドリンと多少脈絡が存するのである。蓋し古代に於けるリラ類、リウート類の二種は其構造形状の大なる相異點を除けば奏法、調子、絃數等甚だ相似たる點が多いからである。前記キタラは語原だけがギターの基と成つたものではあるが此點に於て必ずしもギターと關係ないとは云はれないのである。

ハープ類ともリラ類とも一寸異つた樂器がある。それは我邦の箏の最原始的なものと云ひ得る平琴である。ギリシアのネベル(Nebel)、アソル(Asor)等がそれである。アッシリアにはトリゴノン(Trigonon)の如き三角琴もあり二十絃をもつたマガディヌ(Magadis)がある。之等はハープ類やリラ類とも異なつたものではあるが特に一類として私は擧げないで置く。同時に本稿には關係が極めて稀薄であるから之以上は述べない。

リウート類は唯一の有桿屬である。圓形の響鳴胴に桿を附し桿の頭部から胴の一部へ絃を張り之を腿上に抱へ(立奏時には胸と右腕とで之を支へ)左手指は支柱上に於て絃を押へて調子を變化せしめ右手指若しくは右手指にもたれた義甲を以て奏したのである。

茲で又一言しなければ成らぬのはリウートなる名は勿論中世に至つて現はれた名稱であつて古代にはなかつたものである。唯此名稱が最廣く知られて居るので古代樂器を説く際に於ても之を總稱として用ふる次第である。

エジプトにノーフル(Nofre)又はネーフエル(Nefet)と名付けられた樂器がある。カール・エンデエルは此樂器が紀元前千五百年以前から存在し且桿にフレットを有して多様に調子を變化せしめる事を考へたのは如何にエジプト人が音樂上進歩した頭腦をもつて居たかを證するものであると述べて居る。當時の壁畫などに多く現はれて居る處を以てすれば胴の大きさは今日のマンドリンよりも稍大なる位の程度で

形状はギターの如く中央が縊れて居り背面は圓形か平面か明瞭を缺いて居る。桿は胴の長さの約二倍半あつて我三味線の如く細いものであつた。絃数は二本乃至四本且すべて♯はないがフレットを有し、演奏には義甲を用ひ且立奏座奏共に行はれた。古代の或陵墓からもたらされた壁畫の一部が英國博物館に存在するが之には二人の婦人が此樂器を奏で、居る狀が書かれ、樂器には明にフレットが見えて居る。

同じくエジプトにオード (Oud) 又は (Oud) と云ふ樂器がある。胴の背面が圓形であつた事は確實であつたらしく其他大凡ノールフルに近くフレットを有し指又は義甲を以て奏せられた。古代の方尖碑等に屢々現はれて居る。

ギリシアにはバンドウラ (Pandoura) があつた。一説にエジプトのノールフルから來たと云はれるが事實は孰れも東洋から流れ來つた樂器を基として生れたものと見るのが正しいらしい。バンドウラは長い桿と比較的小さい胴と三本の絃をもつて居た。之を以て見てもノールフルに近い事は判る。此名稱の起原はパンの神(牧神)が此

樂器を作つた爲に斯く名付けられたと云ふが反對説もあつて明かでない。

バビロニアにはタムプウラ (Tamboura) と云ふ樂器がある。全然バンドウラと同じ徑路を通つたもので勿論外形絃數等に多少の相違はあつても別種のものとは見られない。而して名稱もバンドウラからなまつたと見るのが正當であらう。タムプウラは多く義甲を以て奏せられた。注意すべき事はバンドウラ、タムプウラは孰れも背部が平面で半卵形をなし副木を有したと云ふ事である。即ち構造に於ては後のギターに近いのである。何となればリウットは副木を有せず、ギターは副木を有するからである。

ギリシアにはキッサン (Kissan) と云ふリウット類の樂器があつたと云ふが明かでない。

古代リウット類に屬する樂器は以上に止まらない。然し要するに大部分はフレットをもつて居り彈奏は指又は義甲を以てしたのである。而して極概括的に觀察すれ

ば指を用ひるものがギターの祖であり義甲を用ふるものがマンドリンの祖であると云ひ得る。

義甲は兀鷹の羽を以て作つたものが最初であると傳へられる。兀鷹かごうかは明瞭でないが少くとも鳥の羽で作つたものである事には誤りはない。そして次第に各種の材料が用ひられる様に成つた。樹皮、象牙、獸骨等は其例である。形状は種々あつたらしいが多くは細長いもので且其一端だけが用ひられるものと両端共に用ひられるものとあつた。此兩端を用ひる義甲は我三味線、琵琶等の義甲(撥)の上兩端共用ひられる事に似通つて居る。

ギリシアの女詩人サッフオー(紀元前六百年)が象牙で作つた一吋程のものを用ひたのが義甲の嚆矢であると云ふ説が傳へられるが、私は此説を肯定し得ない。若し二三歳の幼児に絃樂器をもたせたならば彼はそれを如何に弄ぶであらう。彼は先づ絃に手を觸れる。そして音の出る事を知つた彼は無暗に絃を掻き鳴らす。それに飽

きると次には何か棒片の様なものを持つて來て絃を叩き鳴らす。之は極めて自然な成行である。如何に野蠻な古代の東洋人も既に自ら絃を張つて音を出す道具を作るだけの脳力があれば當然の徑路として絃を撥く道具を作つたと考へるのが無理であらうか。此點よりして私は古代東洋人が不完全ながら義甲をもつて居た事を想像する。一步を進めてよし東洋人がもつて居なかつたと假定するもエジプト人は夙に義甲を用ひたのであつてサッフオーを義甲創造者と見做す事は到底出來ないのである。

尙リウート類の祖は龜の甲を其儘胴として作られたと云ふ口碑がある。而も此口碑は多くの學者の間にも有力な説となつて居るが絶對の信は措き難い。

曩きにも記した如く西洋の古代樂器はすべて東洋のプリミテイヴな樂器が祖をなして居る。リウート類の樂器も亦其祖は東洋に起つて居るが、東洋人のもつたりウート類には桿はあつても單に絃を張る上の必要から作られたもので調子を變化せしむ

る事迄は考へつかなかつたであらう。従つてフレットは無かつたと想像される。然し一つ疑問として残る事は往古基を同じくした琵琶は我邦のも支那のもフレットを有する事である。然し私の考察では之等のフレットは古代から存在したのではなく東洋から西洋に入つた後樂器が改善されてフレットを附せられたものが再び東洋に來つたか、若しくは東洋に残つた樂器に後世人が附したものであらうと思ふ。

古代樂器は勿論各種の形状と構造をもつたが要するに以上の種類中に包含せられるものゝみである。而して中世に入つては構造上に著しい進歩の跡は認められな
いが用途の擴大は甚だしい變化を示した。

本編 中世より現代

第一節 リウートの發達と凋落

中世に入つても上期(四世紀より十世紀)に於てはリウート類も樂器として大なる變化をなしては居ない。然し此期に於てリウートなる名が總稱的に用ひらるゝ様
成つた事及此樂器が歐洲に入つた事を知らねば成らない。

リウートの語原については茲に三つの説がある。其第一はアル・ウッド (al'ud) (木の意) と云ふアラビア語が初めであつて後歐洲に於ては此冠詞の母音が省略され
ルト、ラウド、リウートなどと發音される様に成つたと云ふ説、第二は同じくアラ
ビア語のエルー (el'ee) (木の意) が初めであつて之がベルシアから西歐各地に渡る
間になまつたものであると云ふ説、第三は lute が語源であつて即ちリウートの音
域が A から G 迄ある事を示すとも云ひ又は $\text{f}(\text{p})$ が長音階を表示し、 r が短音階

を示すのだとも云ふ。

第一説は最多くの史家の説く所である。今日リウートを佛でリュート(Luth)、伊でリウート又はレウート(Luto, Lento)獨でラウテ(Laute)、和蘭でルイト(Luit)、西班牙でラウド(Laud)、葡萄牙でアラウド(Alaude)、英でルート(Lute)と呼ばれるが第一説をなすものは葡萄牙が最原語に近い發音をもつて居ると稱へて居る。然し彼等の説の根據の甚怪しいのはアラビア語のアルウド其物が何の意味でつけられたかと云ふ事である。第二説に到つては尙更であつて極端に解すればルートに近い發音をもつアラビア語を探策してエルーなる文字を發見したとさへ考へられる。第三説は有名なガリレオ・ガリレイの父でリウートの優れた奏者であり且作曲家であつたヴィンツエンツォ・ガリレイ(Vincenzo Galilei)が千六百二年に公にした著書「イル・フロニモ」(Il Fronimo)の中に説いた所であつて此説は明に注意すべきものである。然しながら吾々が不安を感じるのは其餘りに穿ち過ぎて居る點である。餘

りに理論的に過ぎる點である。

茲に私は今迄に稱へられない一つの説を敢て提出したいと思ふ。現在アラビア語でリウートをエルウド(Er'oud)と記すが私は此エルウドの綴りが最古いアラビア語を其儘引ついで居るのではないかと思ふ。果して私の考が誤らなければ前記の諸説は明に覆す事が出来る。何となれば私はエルウドの(Oud)は古代樂器のオード(Oud)であつて之に冠詞を附したに過ぎないと考へるからである。オードがリウト類の樂器の中最古いものゝ一つである事から考へ殊に現在エジプトでリウートをOud又はLoudと記して居る事實を思へば此説が決して私一個の幻影的假想でない事を首肯して戴けやう。恐らくエジプトのオードは古代諸國に於ては同一名(若しくはそれに近い名)を以て呼ばれた儘、中世に入つたであらう。

最後に一言しなければ成らぬのはフェティス(Fetus)が其音樂史に於て「リウートは東洋より來り最初エオウド(Foud)と呼ばれた」と云つた事を最近にベネデット・

ランデイーニが其著「イル・リウート」に於て此樂器は初め Leut, Lut, Luit, Luic, Lus 等極めて雑多なる發音と綴字とをもつたと云つて居る事である。然しながら私が改めて云ふ迄もなくフェテイスのエオウドはオードに關する幾多の記述が之を認めず、又ランデイーニの云つた事はリウートに就いての初期の問題とは受け取れないのである。

アラビアに此樂器が入つたのは六世紀であつてペルシアから傳はつたらしい。カール・エンヂェルの言に従へば六世紀頃唄と此樂器とを習得するためアラビアからペルシア王の許へ行つたものが、やがて此樂器をメツカに携へ歸つたと云ふ。當時のアラビアは稀代の英雄マホメット出で、威四海に振ふ時であつたから此樂器はアラビア國內に愛用されると共に更に近隣諸國に傳へられたのは蓋し想像に難くない。然し此頃のリウートは未だ確實に *Lyra* などとは記されなかつたらしく、それが此名を以て最初に發音されたのは七世紀の事であると云ふ説に私も同感である。

同時に名稱は勿論オードが其語原となつたのではあるが樂器としてのオードがリウートの祖であるとは私は斷じない。何となればリウートは古代のリウート類即ちバンドウラやタムプウラ等を含むすべてのリウート類が其祖をなしたと云はねば成らぬからである。序にアラビアのリウートは東洋殊に支那の絹線を絃として用ひたと云ふ記録がある。

リウートが歐洲に入つたのは彼の十字軍の手によつてであると言ふとジョージ・グロヴもルネ・ブランクールも云つて居るが必ずしも信を措き難い。マホメットの後繼者達(ハリファ)が諸方を征服し七百年にはアフリカ北岸一帯を平定し翌年には既にイスパニアに侵入して居る。そして八年の後全イスパニアを併呑したのであるから十字軍の起るまで三百有餘年間にイスパニアには此樂器が傳へられぬ筈はない。十字軍によつて確實にリウートが歐洲に擴められたかは判らぬが此時を以て歐洲人が初めて此樂器を知つたのであるとは考へられない。

イスパニアから北はフランスへ南はシチリアに傳へられたと云ふ事がフエティス (Fests) の音楽史に現はれて居る。前に記したガリレイの著書にはシチリアに入つた リウートは後に匈牙利の地を占めたバンノーニ人によつてロンバルド・ベネトに賣 され、それより更にバドヴァに來り、此地に於て著しい改善發達を見せ、爲にバド ヴァ風のリウートなる名稱さへ出たと云ふ事が記されて居る。

ブルネ (Brunet) はフランスに於てリウートに關する最初の記録は千三百七十年に グリエルモ・デイ・マシヨール (Gugliermo di Machault) の書いた小説「アレクサンド リアの占領」中にルー (Leus) と云ふ綴りで記されたものであると云ふ。之は彼が佛 蘭西に於けるリウートの沿革を知る上に重要な事實として擧げたのである。

孰れにせよ、リウートは歐洲全土に廣く知られ用ひられた。バンドウラ、タムブ ウラ等の名を以てしたるものも勿論あらう。イタリアに於てはテストウード (Testudo) の名もリウートに用ひられた。此名は明にリウートの形が龜の甲に似て居た所から

起つたものである。(一説に東ローマ帝國から此國に入つた樂器にテストウードと 名付けたのが歐洲にリウートを紹介した最初であると云ふが之は全然誤りである。 又テストウードなる名はラテン語であつてイタリアではラウテ (Lute) 又はリウー ト (Luto) と云つたのであると云ふテストウードをイタリアから引離して仕舞つた 説もある)。

中世中期に入つて十二世紀佛國ブヴァンス地方に彼の漂遊歌人トロバドールが 起つた。そして伊太利、西班牙等に及んだ。彼等は元十字軍の結果として起つた騎 士を祖としたもので彼等の音樂は歐洲俗樂の基と成つたのである。彼等の歌謠は簡 單な戀愛歌で最初は純潔なものであつたが漸く墮落した。其用ひた樂器はヴィオル (ヴァイオリン系樂器の基をなしたるもの) ハープ、リウート等であつて伊西のトロバ ドールはギターをも用ひた(「ギターの獨立」の項參照)次にトロバドールに似た樂 人が獨逸に生れた。ミンネジンゲルである。彼等の多くは詩を好む貴族であつて婦

人を敬ひ尊んだ。其作る處の歌謡は大部分戀愛歌である。ミンネジングルに續き十四世紀より十六世紀に亘つてマイステルジンゲルが起つた。彼は比較的進歩した音樂の道程を歩むだが餘りに形式に捕はれた爲十七世紀に入つて殆んど滅亡に陥つた。

彼等俗樂研究者は前記の如くリウートやギターを用ひた。

リウートは十五世紀から漂遊歌人の玉條とする戀愛音樂に眞個に打入り初めた。當時の君主や領主はリウート奏者を詩人の隨從者の位置に置いた。法皇レオ十世の朝には城と共に郡主の尊稱を得た猶太のリウート奏者も居た。千四百八十二年フィレンツエの領主メデイチからミラノの領主イルモロへリウートを齎らす使者に立つた若者がある。彼はイルモロの前で自作の詩を此リウートを伴奏として唄つたが其美聲と美貌とはイルモロの廷内の評判となり若者は此時以後此地に止まつた。彼こそは有名なレオナルド・ダ・ヴィンチである。事實彼は立派な奏者であつたと傳へら

れる。アルベール・ド・リツプも亦リウートとギターの優れた奏者であつたと云はれ、英國のエリザベス女皇はリウートの一種ポリファン (Poliphant) を樂しみ奏でたと記される。

リウートは全く媚樂の樂器として恰天上の樂の源でもあるかの如く愛され尊ばれたのであつた。此當時リウートを謳歌する詩や唄は數へ盡す事も出来ない。獨逸には「美事なリウートの技は美を愛するものを得る助となる」と云ふ諺さへある。千六百二十一年にルネ・フランツアに由つて書かれた「自然の優れたる試み」の内には次の言が見られる。「茲に尊敬すべき奏者ありてリウートをとり其絃と和音とを驗めんため且意想を求めんとして三撥を與へ震音の歌を初めんか、人皆の眼と耳とは眞に之に惹きつけられ、彼若し指にて絃を悲痛せしめんか、聽者は直に憂愁の境に入るべし。見よ。或ものは首をうなだれ、或ものは眼を見開き、又或ものは口を開き、恰も絃上に精神を釘付けられたるものゝ如し。加ふるに和聲の偉大を以てせんか、精

神感情のすべてを左右し得る事、極めて容易なる業のみ」と。

千五百八十年フレスコンバルディ(Frescobaldi)はリウートの爲に歌謠を書き、コレルリ(Corelli)はヴァイオリン、ヴィオロンチエロ、リウート(又はアルチリウト)の三部用のソナタを書き(其中の一つは千八百六十年にポローニアで發行された)、サンマルティニ(Sammartini)は彼のオーケストラ中にリウートを加へ、モンテヴェルデ(Monteverde)は其「オルフェオ」中にリウートを用ひ(千六百七年)、バッハは「聖ジャンの受難」其他に此樂器を用ひた。(極めて近い過去の事ではあるがサンサエンズはリウート用の幻想曲をハープの爲にアレインデした)。

リウートは最後迄指と義甲とで奏でられた。義甲は初期には古代より引續き樹皮、羽毛、象牙、獸骨等が用ひられたが次第に鼈甲を使用する様に成つた。指で奏せられるものが後に漸次ギターに惹きつけられた事は次節に述べる。

リウートの盛時之が製作家として多くの名匠が出たが中にも獨逸のルカス・マ

ラー(Lucas Mäler 又は Laux Mäler)や佛のジャコモ・モンティエ(Giacomo Gauthier)は特に名が高い。今日マンドリン製作所として知られるヴィナツチアやカラッチェも其創始はリウート製作であつた。

リウートの盛時は十六世紀及十七世紀の初めを最とした。そして十八世紀に到つては明に凋落の兆が見え自滅の止むなきに到つた。

リウート衰滅の原因は絃數の増加によるものである。

初期に於て四對(開放絃四音)であつたリウートが十五世紀に入つて一絃を増し、其儘十六世紀に到り最大限六對を有つたが其後更に増加される様に成つた。茲に於て樂器は到底此多絃の緊張に堪えられなく成つた。巴里では一個のリウートを保有するは馬一頭を養ふに等しいとさへ云はれた。又リウート奏者が樂器の破壊に因つて時折り腹部に怪我をしなければ幸であるとも皮肉られた。第二に多絃に傾いた結果調音が全く困難に成つた。メルサンヌは「リウート奏者が確實に調音をなし得る

のは六十年の過去を有する八十の歳である」と云ひ、更に一皮肉家は「リウット奏者は調音はするが決して演奏しない」とも云つた。マルティン・アグリコラは千五百三十二年に「リウットの記譜法を發明したのは恐らく盲人であらう。何となればすべての鑑識家は大きく見開いた二つの眼を以てさへ此記譜を解するに充分困難を感ずるのであるから」と書いて居る。勿論調音を困難ならしめた一因として糸巻の不完全さをも考慮する事は必要である。

斯くして十八世紀に入つて遂にリウットは自傷自滅を餘儀なくされた。然しながら中世に於てリウットから獨立したギター及近世に生れたマンドリン及其兩系の樂器が今日に残つて將來更に大なる發達を見んとしつゝある事は彼リウットに取つて密に滿悦禁じ難いものであらう。

第二節 ギターの獨立（及ギター系樂器）

次節に述べんとするテオルボ、マンドウラ、マンドリン等は孰れもリウット類の直系の樂器であるがギターのみは中世に入つて夙に獨立した。私がギターのみを茲に説かんとする所以は實に茲に存する。

史家は此樂器がムール人（北アフリカに住んだ回々教徒）に依つて西班牙に齎されたのが歐洲にギターの入つた初めであると言つて居るが然らば何時齎らされたかと云へばそれは甚だ曖昧である。

グローヴは云ふ。「西班牙のサンチアーゴ・ダ・コムポステルラに於けるマテオ師の有名な光輝門には數種の樂器が畫かれて居るが其内にギター型の樂器がある。之こそギターの前身たるヴィフエラ（Vihuela）であつて其奏者は弓をもつて居ない。此門の製作年は紀元千八百八十八年であつてムール人が此樂器を西班牙に入れたのは之より前百年を出でないであらう」。即ち彼の説に従へば十二世紀に於てギターの前身

たるヴィフエラが西班牙に入つた譯である。ヴィフエラはギター及ヴィオルの祖であつて或物は指、或物は弓、或物は義甲と云ふ様に演奏の手段によつて確然と區別されて居たものらしい。要するにムール人が齎らしたものはヴィフエラであつてそれは勿論古代樂器たるリウート類の一つであつたのである。然し尠くとも未だギターなる名稱はもつて居なかつたのであつて此名の現はれたのは恐らく十三世紀に入つてからであらうと思はれる。其名の依つて來る處は明に古代希臘のリラ的一種たるキタラであるが然し其間に樂器として何等の脈絡がある譯ではなく單にヴィフエラの内、指を以て奏するものにキタラなる名稱をとり入れてギタルラ (Guitarra) と稱するに到つたのである。西班牙は明にギターの祖國たる名譽をもつた。

此時以後ギターはリウートから獨立したと云ひ得る。然し其後のリウート中、指で奏せられたものがギターと接近して居た事は勿論であり後には漸次これがギターの方へ引きつけられて行つた。(此事は後にリウートギターの項に述べる)。

ギターの形狀は明に弓を用ふる樂器から來たと説く人がある。蓋し弓を用ふる爲には胴體の兩側を縊れしめる事が必要だからである。而して之は前記ヴィフエラが弓を用ふるものと指を用ふるものとあつた事實に徴するも首肯出來る事である。然し之にも絶對的の信は措き難い。何となれば弓を全く用ひなかつた古代に於て既に瓢箪型に近いノーフルが存在した事實があるからである。

初期のギターは復絃三對と單絃一本をもつたものであつたらしい。勿論之が原體ではあつても當時は可成自由に絃數なども一定しては居なかつた。或ものは十本、十二本の絃をもつて居た。尤も斯くの如きは大凡二本宛同音に調音せられて復絃五對六對となつて居たには違ひない。十二世紀以降彼のトロバドル等の歌人(殊に伊西のトロバドル)がギターを用ひた。リウートに於けると等しくギターも亦其獨創價值が彼等歌人に依つて現はされる事は無かつたが然し此樂器が通俗的に用ひられるに到つた事に就いては吾々は大に彼等に感謝しなければ成らない。

ギターが五絃と成つた時期は明瞭でない。が恐らくは十六世紀の事であらう。十七世紀からはギターの勢力が更に擴大された。リウト衰へて全くギターには大なる光明が與へられた。而も後にピアノが完成される迄は和音楽器として最重要に取扱はれたのであつた。

十八世紀の末ギターには一大改善の手が加へられた。千七百八十八年獨逸サクソニアの女公アンナ・アマリアによつてギターが伊太利の樂器として獨逸に紹介されて後サクソニア宮廷の最初の音樂師ナウマン (Naumann) の命により宮廷付樂器師ヂャコブ・アウグスト・オット (Jacob August Otto) なる者が初めてギターに第六絃を加へたのである。之は千七百九十年の事と云はれる。オットは又ギターの第四絃に從來太いガット線が用ひられたのを絹線の上を細い金屬線で巻いたものに代へた。

此改善と同時にギターの隆盛は極度に達しカルツリ、ソル、ジュリアーニ、メルツ等の大ギタリスト輩出し、茲にギター音樂の隆盛期は劃されたのである。(「ギター音樂小史」参照) 一方佛にラコート、デラゼー、ラブレヴオット、英にバノルモ、ルードロフ、塊にスタウフェル等の巨匠が出て大ギタリストに協力し優秀なるギターを作る事に努力した。就中ラコートとスタウフェルとは最偉大なる名星であつた。然しながらピアノの完成は明にギターに禍した。他の何物を以てしても能はぬギターの音の表情の美や極めて魅惑的な其和音等も確にピアノからは影響をうけた。蓋しそれはピアノの和音が廣く自由だからである。

佛國のギター界は第一に衰へた。伊國は比較的力を弱められなかつたが然し十九世紀後半に入つては衰傾に陥つた。幸に西班牙にタルレガ、フェレール以下の有力なる大家が輩出した爲に西班牙は相變らずギターの祖國として獨り輝いた。

話は稍逆行するが西班牙に育くまれたギターが他國に紹介されたのは比較的後世の事である。現に獨逸に十八世紀末に入つた事は前に記した通りであるが、英國に

も千八百九年ソルが赴くまでは入つて居なかつたらしい。伊國には此兩國に傳はるよりも遙に早く傳へられた事は確であるが其時代は明瞭でない。但し伊國のトローバドールが早く既にギターを用ひた事實に徴するも十三世紀西班牙に於てギターが獨立してより間も無い事と思はれる。佛國ではギテルヌ(Giternne)英國ではギターン、ギゾーン(Gittern, Ghittern, Gythorn)等と呼ばれた。(但し今日英國でギター(Guitar)と呼ぶ事は改めて云ふ迄もない)佛國でモラシユ(Morache)の名を以てギターの一種が愛せられたのは十五六世紀の事であるから恐らく此國にギターの紹介されたのは此頃の事であらう。

十九世紀の初迄にはギターも種々の形状をもつた。指板の如きも胴體との接合點までとあつた事があり、後延長したにしても單に表面板其ものにフレットが加へられたに過ぎなかつた。指板其物が胴體の上に延長したのは恐らく十八世紀の終りであらう。形も一律でなく非常に細長いものもあり、且ナポレオン・コストの用ひたるの如く響穴下に指置板が特設せられたものもある。

裝飾はすべての樂器に於けると等しく十六七世紀の作品には概して之が多い。英國のヴィクトリア・アルバート博物館に現存する十七世紀の佛國ギターの如き其好箇の例である。之を奥國維納のシュューベルト博物館にあるシュューベルトのギター、ハンス・ウムラウス所藏のシュューベルトのギター、ベルリオーズとバガニーニが用ひたギター、及私の所藏するラコート作ギター等に比すれば全く隔世の感がある。之等は孰れも徒らなる裝飾を避けて實質に重きを置く様に成つた事實を物語る。

ギターに鋼線を用ふる様に成つたのは十九世紀の後半期以後の事である。糸巻に機械的なものが用ひられる様に成つたのは之よりも稍前であらう。然しギターの絃線に就ては今以て鋼線を用ふるものと腸線を用ふるものとある。本邦や米國では殆んど鋼線を用ひて居るが伊佛等の諸國では主として腸線を用ひて居る。鋼線は音量に優つて居り、腸線は音色に優つて居て、之は將來も併び生きて行くであらう。

十六世紀頃から作られた楽器でクキンテルナ、又はキテルナ (Quinterna 又は Chiterna) と名付けられたものがある。單絃四本、指を以て奏せられ主として喜歌劇俳優が其歌の伴奏に用ひたと云ふ。此楽器は用途から見ればギターの一つであり形状よりすればシザーの種類に屬する。(シザーに關しては後節に述べる)。

形状に昔のリラを取入れたものがある。今日もキタルラリラなど、名付けられて作られるが之は全然ギターである。

名匠スタウフェルはギターロンチエロ (Guitarroncello) 及ギターダムール (Guitarre d'Amour) と云ふ楽器を作り、バーンバッハ (Birnback) は弓を用ひて奏するギターとヴァイオリンのコムビネーションを作つたが成功しなかつた。

形状にリウートを取つたリウートギターに就いては特記する必要がある。此ギターはリウート中の指を以て奏するもの、殘存者であつて勿論リウートの一種ではあるが、リウート衰滅の後、絃數も用途も全然ギターに惹きつけられて今日の命脈を

保つたものである。従つて彼は今日ではギターの種類と見るのが正しいのである。

テルツギターは形状も構造も何等ギターと異なる所がない。唯大きさに於てギターよりも小型であり、音程がギターよりも短三度高いだけである。テルツギターなる名は勿論伊太利語のテルツオ即ち三度を意味してつけられたものである。此小ギターは高音を出す事を目的として作られ、大ギターリスト、ジュリアーニによつて先づ紹介され、次でレニアーニによつて更に用ひられた。彼等は常に當時の有數なる製作家と交はり名樂器の製造をなさしめた。レニアーニは維納のスタウフェル、リーズ等に自己の考案に成るテルツギターを作らしめた。(私が所藏したスタウフェル作のレニアーニ型テルツギターが昨年火災に灰となつたのは遺憾に堪えない)。

ハーブギターは普通のギターに幾本かの開放絃をもたしめたもので之が創案者に就ては一説に十九世紀の前半期に於けるギタリスト、ベニエツキー (Beniezki) がハルポリラ (Harpolyra) なる名によつて之を創製し尙別にダブルバスギターとも云ふ

ベギアクリポリラ (Acilpolyra) を作つて千八百四十二年から約一年間巴里、維納、
ミユニツヒ等に於て此二樂器紹介の演奏會を開いたが成功は見られなかつた。此ハ
ルポリラが即ちハーブギターの嚆矢である云はれ又一面に於てはカルツリが名匠
ラコートの許に滞在し作らした樂器の中に十絃のギターであるデカコルド (Deca-
corde) と稱するものがあつたとも云はれる。之は六本の基本絃の他に四本の番外絃
をもつたものであつて而も千八百二十八年の作と記録せられるが故にベニエツキー
よりも古いわけである。

然しハーブギターの濫腸は明にテオルポ及其一種であるアルチリウート、キタロ
ーネ等の二重糸巻から出でたものであるから、之が創製者はカルツリ乃至ベニエツ
キーよりも前にありはしないかと思はれる。今日ハーブギターは可成廣く用ひられ、
番外絃を加へて十六絃に及ぶものがある。そして米國ではすべてハーブギターと呼
ぶのに引換へ、伊太利では單に九絃のギター、十絃のギターなど、呼び特にハーブ

の形を模したものにキタルラアルパ (Chitarra-Arpa) の名をつけられる。そして桿も
復桿のものと單桿のものがある。

最近い過去に生れたギター系の低音樂器にアルチキタルラ、キタローネなる樂器
がある。之等はマンドリン合奏が進むに連れ、低音部を充實せしむる爲に作られたも
のであつてアルチキタルラはヴィオロンチエロと等しく床上に立て腰を下して奏
し、キタローネはダブルバスと等しく立奏する。兩者共單絃四本で指を以て奏せら
れる。一言しなければ成らぬ事は此キタローネは昔のテオルポの一種のキタローネ
からは何の血統も惹いて居ないと云ふ事である。單に命名に古の樂器名をとつたに
過ぎない。然し命名の上から見れば「大ギター」を意味する「キタローネ」は今日の樂
器の方が適當である。キタローネもアルチキタルラも新らしい樂器であるがベニエ
ツキーの作つたアクリポリラは恰今日のキタローネの如きものであつたと思ふ。

此他に變形のギターは可成りあるが孰れもギターであつて別種のものでない。唯

注意すべきは露西亞の七絃のギターと復絃のギターである。前者は基本絃が七絃であつてハープギターの如く番外絃をもつものでない。之は露西亞に用ひられるものであるが一般には容れられず又ギターの永久的生命は矢張り六絃のそれにある事を思はせる。復絃のギターは歐米に於て時に見出されるが、私には何故に復絃になすかを想像出来ない。

第三節 テオルボ、マンドウラ等の變遷とマンドリンの完成

(及マンドリン系樂器と其他すべてのリウート類樂器)。

前節に記したギターは其昔リウートより出で、夙に獨立して仕舞つたものであるが此節に於てはリウート系の樂器として世に現はれたものゝ事を述べやうと思ふ。

第一にテオルボがある。佛でテオルブ (Theorbe)、トゥオルブ (Tiorbe)、伊でテイオルバ (Tiorba)、トゥオルバ (Tuorba)、西でテオルバ (Teorba)、タイオルバ (Tiorba) 等と記される。一説に此樂器は十七世紀の初伊太利人バルデルラ (Bardella) によつて發明されたと云はれるが、元來此樂器製作の動機が低音を含む多音の樂器を作らんとした事にあるのに徴してリウート衰傾期に入つた十七世紀に初めて作られると云ふ事は稍首肯し得ざるものである。ランデイーニは千九百二十一年にリウートに關する書籍を公にしたが彼は伊太利人であるに拘らず此樂器の發明は佛國に於

てなされたと云ふブロッサール (Brossard) の説を肯定して居る。私は十五世紀更に詳しく云へば千四百五十年頃に伊太利で出来たと云ふ説を探り度い。但し其名稱に至つては果して初から附けられたか否かは不明であつて或は此名稱附與の名譽は前記バルデルラがもつものかも知れない。

テオルボの特徴は二重に糸巻をもつて居る點であつてそれが爲に復桿のものも勿論ある。要するに或絃は指板上にあつて音は變化せしめられるが或絃は指板外にあつて全然開放絃として使用せられる。挿繪に入れたハレー作のテオルボは胴の側面が直線に成つて居るが之は寧ろ變形の部に屬するもので多くは胴體が普通のリウートの如く圓形をなして居る。又ヴェントウラのテオルボは見らるゝ通り指板が三通りに分れて居り糸巻は全然ハープを模して居るが之は十九世紀の初期の作であつてテオルボとしては最行き詰つた作品である。(テオルボの代表的な寫眞を入れる事が出来なかつたので此二葉を入れたが純粹のテオルボとしては二葉とも面白いも

のでない。讀者は寧ろ現代作として擧げたテオルボに就いて十六七世紀のそれを想像せられた方が正しい)。

ブランクールは十七世紀頃のテオルボに就いて第一の糸巻にかゝるものは六本の復絃で指板上にあり、第二の糸巻にかゝるものは八本の單絃であると述べて居るが之は單に一例であつて決して此通りに一定して居たわけではなく各々十本乃至十四本の絃をもつた事もある。英國に於ては十七世紀頃普通用ひられたものは十二對の復絃で六對は指板上に他の六對は指板外にあつた。而も製作家は二十對さへもたしめやうと試みた。最甚しいものはヴェントウラのそれにある如く三個の糸巻をさへもつたものがある。リウートに於て伊太利バドヴァ市に於ける作品が代表的のものとせられた如くテオルボもバドヴァのものが最良であると云はれた。

テオルボは曩きにも記した通り低音を多くもつリウートを作らんとして出来たものであるからリウート類の中普通のリウートに次いで廣く深く愛好せられた。千六

百年にはペリ(Peri)のユウリデイス(Euridice)に用ひられ又ヘンデルのエステル(Esther)にも用ひられた。

アルチリウート(Arciluto)と呼ばれるテオルポがある。テオルポと異なる點は大型な事であつて矢張り番外絃をもつて居る。キタローネ(Chitarone)はローマ風のテオルポとも呼ばれる最大型のテオルポで六呎以上の長さをもつて居た。獨逸出のリウート製作家として知られるブツケンベルグ(Buckenbergh, Buchenberg)はローマに在つて此樂器を製作したが其一つは七呎四吋の長さをもつて居る。(挿繪参照)キタローネについてエンヂェルは「ピアノの前身たるクラヴィチェンパロやハーフシコードの生れる前、劇場に於て聲樂の伴奏をつとめた」と云つて居る。グローヴは「キタローネは稍短き桿を有するテオルポにして伊太利にては桿の長さものをアルチリウートと云ひ獨逸にてはキタローネと云つた」と云ふ前述と稍反對の記述をなしたが要するにキタローネとアルチリウートの區別は事實頗る曖昧なものであつたらしい。

挿繪のアルチリウートとキタローネとを参照されたならば如何に其區別の立て難いかは首肯されやう。殊に或國に於てアルチリウートと呼ばれたものがそれ自身別の國ではキタローネと呼ばれると云ふ様な有様であつたから尙更區別は困難である。(序に斷つて置かねば成らぬ事は此アルチリウート、キタローネ共に今日新に生れた同名の樂器との間には何の脈絡もないと云ふ事である。今日のキタローネはギター系の最低音樂器であり、アルチリウートはマンドリン系の最低音樂器である。之等は孰れも新らしい樂器に古い樂器の名をつけたに過ぎないのであつて其間に系統上の直接の連絡はない)。

大型リウートでアルチリウートやキタローネに酷似する十絃の樂器がある。形狀からも二重の糸巻をもつ事からも之等の樂器の姉妹と見えるがよく觀察すると絃が全部指板の上にある。此點に於て此樂器はリウート類の樂器ではあるがテオルポの中には含まれぬものと云へる。之はデカコルド(Decacorde)と云はれるものである。

又二十一絃をもつムルテイコルド (Multicorde) も同様である。唯ビゼー (Bissex) と呼ばれたものはテオルポの一種として認められる。デカコルドやムルテイコルドなどは皆十八世紀頃あらはれた。リウート衰滅の悲しみを思はせる不幸の子である。テオルポの類について尙知らねば成らぬ事は今日のハープギターが此テオルポの構造から生れたものであると云ふ一事である。ハープギターの番外絃は明にテオルポのそれを模したものであつて挿繪中にある番外絃附のリウートギターを一見すればそれが如何に正しい考察であるかと判らう。

ランデイーニはテオルポが全部金属線を用ひ、アルチリウートが腸線を用ひたと云つて居るが之は頗怪しい断定である。又彼はテオルポ、キタローネ、マンドウラ等に遅れてアルチリウートは生れたと云ふて居るが之も信を措き難い。私はテオルポ、マンドウラ生れ、後にキタローネとアルチリウートとが殆んど同時に現はれた事を想像する。アルチリウートの發明者が、ヴァライカンのチャペルのマエストロ

であつたジロラモ・カプスベルゲル (Girolamo Kapsberger) であるとの説は可成り有力であるが詳密な記録がないので必ずしも信じられない。

扱以上でテオルポ及其系統のアルチリウート、キタローネの記述を止める。之等の樂器は今日では全くないと云ふも過言でない。唯時に獨逸でテオルポを作るのを見るだけである。

マンドウラ (Mandoura) なる名をもつ樂器の生れたのはテオルポの現はれた頃であらうと思ふ。千二百年頃に生れたと云ふ説もあるがそれは誤りであらう。

マンドウラの名は明にバンドウラよりなまつたものである。元來 Pan は Pan, Man, Tan 等と變化するものであつて此説は最正しい。グロウヴは此樂器の背部が巴旦杏 (Almond) の形狀をなして居るので此マンドウラなる名の原體も Almond と同一系統の言葉であると云ふが之は稍無理な説明であらう。此 Mandoura が後漸次 Mandora となり末には R と L とを混同してマンドラ (Mandola) とも記される様に成つた。

マンドウラはリウイト類の中では小型な方で桿も短く従つて音域も高かつたらしい。主として義甲を用ひて奏されたが然し初期には指を用ふる場合もあつたらしい。十六世紀頃には既に指を用ふる事がなくなり専ら義甲でひかれた。

マンドウラはリウイト其物やテオルボ程世の中には容れられなかつた。彼の生涯はあまり華やかではない。然しマンドリンを生み、更にマンドリンから今日のマンドラ以下數種の樂器を出した事について充分な誇りと満足をもつて居る。

マンドリンは千六百二十年伊太利ヴェネツィアの人パロッキ(Parocchi)なる者が創製したと云はれる。其名マンドリーノ(Mandolino)は「小型のマンドラ」の意である。マンドリンはマンドウラより高い音を出さしむる事が主要の目的であつて其可憐な音調は美事に伊太利人の性格嗜好に一致した。

但し此當時のマンドリンが世に生れて直ちに異常に愛されたかと云へばさうではない。彼が稍認められたのは十八世紀も後半期に入つてからであつた。其形状は大

體に於て今日のマンドリンよりも桿は短かく太く、胴も稍上下がつまつて居り、絃は腸線を用ひ、糸巻はヴァイオリンのそれに似たものであつた。絃數は創製當時のものとは判明しないが後に流行につれて各種のマンドリンが生れる様に成つてから種々に分れた。即ちナポリ風、ローマ風、フイレンツェ風は單絃四本又は復絃四對ミラノ風(又はロンバルド風と云ふ)は單絃六本をもつた。

マンドリンが伊太利で寵兒となつてから、やがて佛、獨、英等の國々に紹介された。佛ではマンドリーヌ(Mandoline)、英ではマンドリン(Mandolin)、獨では其頃には主としてチタル(Zither)の名で呼ばれた。

此當時のマンドリンが如何に世人から愛せられたか、如何なる音樂が生れたかと云ふ事は「マンドリン小史」に就いて見られ度い。

確にマンドリンは一世の寵兒と成つたが、然し樂器として其構造甚だ不完全であつたと云はねば成らない。指板は僅に十のフレット(後に十二に増加した)を數へる

に過ぎず、絃は腸線を主にしたのであつて而も初期には櫻の樹皮又は駝鳥の羽の固い部分で作つた義甲を以て奏せられたのであるから決して美しい音は出さないのみならず斷音以外の効果は殆んど無かつたのである。

マンドリンの愛好家は藝術上の可能範圍を擴大する手腕はなく、唯稀に指板を響穴の近くまで延長しやうと試みたものがあつたゞけで、それも成功はしなかつたのである。

あらゆる製造家が臆げに考へて居たマンドリン改善の業は遂に十九世紀半ばに於て完成された。

ナポリにリウート及其系統の樂器を製造するヴィナツチア (Vincicia) なる家があつた。之は千七百六十五年デエンナロ、ヴィンチエンツオの兄弟が起した家で其後繼(二代目?) にバスクワレー (Pasquale) (一八〇八—一八八二) なるものが出たが此男はマンドリン改善に關して夙に理想をもち第一にマンドリンの第一絃に完全な

絃線を得やうとして苦心の末千八百五十年頃鋼線を用ふる事を實行した。而して鋼線を用ふる關係上從來の糸巻では殆んど調絃困難な爲に第二に機械的の糸巻(即今日の糸巻)を採つた。勿論此糸巻は此以前からギター其他に用ひられて居たものを採り入れたのである。第三には指板の延長を思ひ、先づ十七個のものを作つた。此三點の改善に伴ひ、マンドリン全體の形狀も稍改められる事に成り、桿を長く、胴も稍長目に變はつたのである。(勿論バスクワレーの改善は從來のナポリ風マンドリンに對してなされたものである)。

此改善はマンドリン史上特筆すべきもので之なかりせば恐らくマンドリンの生命は十九世紀を以て終つて居たであらう。マンドリンの改善はクリストファロを生み、ムニエルを生んだ。そして從來なす能はなかつたマンドリン音樂の獨立に曙光を認めしめたのである。(ムニエルはバスクワレー・ヴィナツチアを大伯父として生れたのである)。指板上のフレットは勿論十七個で満足出来ない。ローマのデ・サンクテ

イス (De Sanctis) 其他が二十四個のフレットをもつマンドリンを作つた。そして今日では更にそれよりも多くのフレットを有する事は改めて云ふ迄もない。

バスクワールは後に伊太利皇后となられた現皇太后マルゲリータ陛下が王女マルゲリータ殿下であられた頃マンドリンを愛好せられたが其御使用マンドリンの製作を行ふ光榮を有した。バスクワール没後其二子、ヂエンナロ、アキツレの兄弟がバスクワールの事業を継承したが最近其家は斷絶し、別家のガエタノ・ヴィナツチアが此家を併せた。従つて今日バスクワールの後繼としてガエタノ・ヴィナツチアを認めなければ成らない。

ヴィナツチアと共に老舗として知られた店にカラーチエがある。千八百四十四年創業アントニオから初まつた家でアントニオの二子、ニコロ、ラツファエーレ兄弟が其家を継承し其後ニコロは米國に移り、今日ではラツファエーレが一人で之を經營して居る。(ラツファエーレが今日の世界に於ける最大なるマンドリン曲作家で

ある事は「マンドリン音楽小史」に見られ度い)。

要するにマンドリンと云へば今日では全然改善されたるナポリ風のそれを指す事に成つて居る。そしてヴィナツチア、カラーチエの二家は最優れた製作家としての名譽をもつ。マンドリンの製作家として古くはローマのベルトウツチ (Bertucci)、クリタイ (Curti)、ハインベルヒ (Heinberg) それに前述のデ・サンクタイス等が有名であるが今日は其後嗣を絶つた。

今日フラットバックマンドリン(扁平背マンドリン)なるものが米國を中心として英國あたりに迄用ひられる。之は奏者が把持し易いので比較的廣く用ひられるのであるが、單に背面が平である以外は全然ナポリ型のそれと同じであつて違つたものとして擧げる事は出来ない。此扁平背のマンドリンは明にシザー(後記参照)の形状を採つたものであるが、其音性の點からも歴史の上からも同感を表し難いものである。

此他或はリラの形を採り入れたマンドリラや、ハープの上尖端の形を模したマンドリナルバなどと云ふものもあり、又三重絃のマンドリン（全部で十二本の絃を有するもの）などもあるが要するに外觀に奇を衒ふか、若しくは誤りたる着想の下に作られたものであつて執る事が出来ない。

マンドリン完成後マンドリン系樂器が續出した。勿論マンドリン合奏の進歩が原因したのである。

クワルタイーノはマンドリンよりも高音を出だす小型マンドリンであつて伊太利で作られた。マンドラは伊太利のマンドリニスト、アキツレ・ダムプロジオ (Achille d' Ambrosio) が製作したものであつて前にも述べた通り曩きのマンドウラから直接に出来たものではなく、低音のマンドリンを得んとして作られたものである。此マンドラはマンドリンより一オクターヴ低いので、其後米國では此マンドラよりも稍高い音程をもつマンドラを作らうと企てヴァイオラと同一音程のものを作り之をテノ

ールマンドラと命名した。今日では此マンドラが伊太利に於ても必要を感ぜられマンドラコントラルトの名を以て用ひられる。之に對して曩きのマンドラを伊でマンドラテノーレ、米でオクターヴマンドラと稱へる。(今日本邦で用ひられるマンドラは殆マンドラテノーレであるが近くコントラルトも用ひらるゝに至つた。)

マンドロンチエロはヴァイオロンチエロに對して作られたものであるが之は米國が基であらうと思ふ。マンドラよりも大型で桿は遙に長い。

リウートはマンドラ(テノーレ)とマンドロンチエロとのコンビネーションであつて伊太利で作られた。之は昔のリウートと區別する爲にリウート・モデルノ(近代リウート)と稱へるのが最も正しい。又カラーチエの命名したリウート・カンターピレなる名稱も適切である。リウートは復絃五對である。

リウートを大きくしたものにリオラがある。近い過去に作られたものであるが、合奏に當つてマンドローネ程の効果は認められない。

マンドリン系の最低音楽器として伊太利にマンドローネ、アルチリウート、米國にマンドバスがある。マンドローネは三者中最も早く作られ、最初は膝上に置いて奏せられたが今日では底部に支柱を立て、床上に置く様にも作られる。此マンドローネは或ものはマンドラより一オクターヴ低く合はせ、或はC、G、D、A、に合はせる様に作つたが、更に低音を要求してG、D、A、E、のものを作つた。今日では此C、G、D、A、及G、D、A、Eの二種が主として用ひられる。

アルチリウートはカラチエが作つたものであつてG、D、A、Eのマンドローネに更に三本の番外低音絃を附した大型のものである。(モンツイーノ會社でアルチリウートの名は附したものは普通のマンドローネに外ならない。)(此アルチリウートも其名のみ昔の楽器を執つたのであつて其間に直接の連絡はないのである。)

マンドローネ、アルチリウートが復絃四對(但しアルチリウートは單線の番外絃を三本もつが)であるのに對し、米國のマンドバスは單線四絃である。ギブソン會

社の創製であつてヴェガ會社も之を作る。

之等現在のマンドリン系楽器に就いてはすべて「マンドリンオーケストラ研究」中に掲げたものを参照せられ度い。

再び古に戻つてリウート類の他の楽器に就いて今少しく考察の歩を続けやう。

古代から引續いたバンドウラの名は中世に入つて尙存在し伊太利に於てはナポリ地方に於てバンドウラ(Pandura)と呼ばれた。英國に於ては小型で下方が廣く八對の復絃をもつたリウートをオルファリオン(Orpharion)、中型で桿が長く九絃をもつたものをペノルコン(Penorcon)、大型で七對の復絃をもつたものをバンドール(Pandore)と呼んだ。(十七世紀に於て此バンドールが宮廷のバレエにリウートと共に用ひられたと云ふ)佛ではバンドウリナ(Pandurina)の名をもつた小型のバンドウラも存在した。

タンブウラも亦後世に残つた。アラビアのタンブル(Tambur)印度、土耳其、ブル

ガリア等のタンブーラ (Tamboura)、コーカサスのタムブル (Tampur) 等がそれである。

十六七世紀頃大陸及英國で用ひられたシザーと云ふ樂器がある。佛でシストル (Cistre, Sistre)、英でシザー (Cither)、伊でチエテラ (Cetera)、獨でシテル、チテル (Cither, Zither) の名をもつた。英國では屢々理髮舖で奏でられたと云ふ面白い記録がある。此樂器は復絃で四對が普通であつたが其後絃數は増加した。

シストル・ア・クラヴィエ (Cistre à clavier) や二個の糸巻と十一絃とを有するアルチシストル (Archi cistre) 等は皆シザーの類である。西班牙に今日用ひられるバンドウリア (Banduria) は西班牙のマンドリンと呼ばれるが之はシザーから生れたものであるらしい。但し十八世紀の末から十九世紀の初に於て英國にあつたバンドウリア (Banduria) (其一つは現にヴィクトリア・アルバート博物館に存する) は今日の西班牙のバンドウリアと直接關係はない。チャールズ六世の治世、乞食達の奏した

チユルユレット (Tururette) も亦シザーの一種であつた。露西亞の農民が奏したバラライカ (Balalaika) は今日では偉人アンドレーエフの力によつて立派な樂器となつたが之もシザーの一種と認める説がある。然し私の考察では古代東洋樂器のリウト類の樂器が直接露西亞に入つて變化したものと認める方が正しい様である。但しバラライカと共にバラライカオーケストラの骨子となるドムラ (Domura) の方は或は歐洲から入つたリウト類の一つではあるまいかと考へる。(因にアンドレーエフは十九世紀後半期に於てバラライカを改善しドムラと結合して多種の樂器を作り立派なオーケストラを完成した。帝政末期には帝室附バラライカオーケストラの指揮者となり又オーケストラを携げて歐米諸國を廻遊し一舉にしてバラライカオーケストラの力を人々に知らしめた。)

ペルシア及印度にも三絃のシザーがありシタル (Sitar) と呼ばれる。Si は三、tar は絃の意であると云はれる。尤も今日印度のそれは五絃に變つて居るさうである。

シザーの盛時は十六世紀であると或人は云ふが必ずしもさうでない。現に千七百七年に書かれたルイ十四世の音楽記録にバリオン (Barion) の作つたシザーの事が述べられ、又千七百六十九年ジャン・ジャック・ルーソーの記録にもシザーの事が述べられて居る。然し事實十七世紀以後は本來のシザーは衰へつゝあつたと見るのが正しい。然るに十七世紀初に作られた伊太利のマンドリンが獨逸に入ると獨逸人は此樂器に又シザー (獨逸ではチテル) の名を其儘與へた。之は一面から見ればマンドリンとシザーとが胴體の背部の形狀を除けば甚だ近接して居るからに外ならない。モツアルトが千七百八十年に作つた小詩「來よ、愛らしのマンドリン」も原語は「Komme, Liebe Zither, Komme」となつて居るが之はマンドリンの事である。又十八世紀の終りにシアルバンテイエが獨逸のギター及シザーに關する教則本を公にしたが此シザーは矢張りマンドリンであるらしい。(前に記したルーソーの記録中のシザーは然し本來のシザーについて書かれたものである。)

バンドウラ、タムブウラ、シザー此三樂器について特に記憶せねば成らぬ事は他のリウート類が皆圓形背をもつに反し之等は扁平背を有する事である。勿論古代のバンドウラ等は圓形背をもつて居たかも知れないが兎に角扁平背をもつのはリウート類で(早く獨立したギターを除けば)此三種のみである。今日の扁平背マンドリンが其形狀をシザーから採つたと云ふ考察を私が下すのは敢て索強附會の説ではない。

之等リウート類の樂器の中今日も尙残るものはマンドリン系樂器は元よりとしてタンブウラやシザーの一種が或は印度に、或は中央亞細亞に、或は土耳其に、其他比較的歐米文化の光をうけない地方に残つて居る。バンドウリアが西班牙に基礎を有し、バラライカが露西亞に在る事は云ふ迄もない。

最後に我邦の三味線、琵琶、箏、支那の蛇皮線、亞米利加印度人の樂器と云はれるパンジョ、今日米國の流行兒となつて居るウカリリ等と歐洲のリウート類との關係に

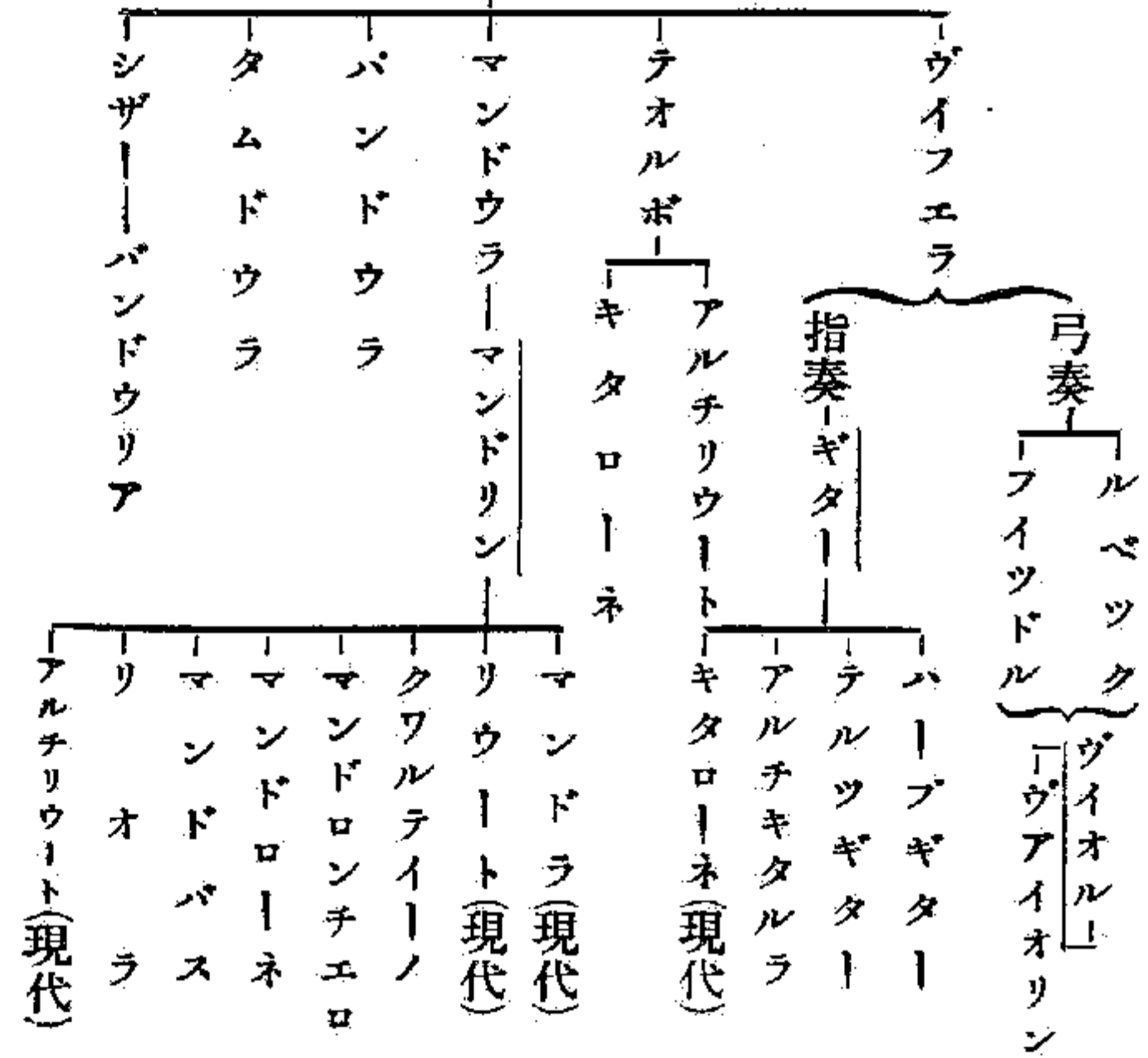
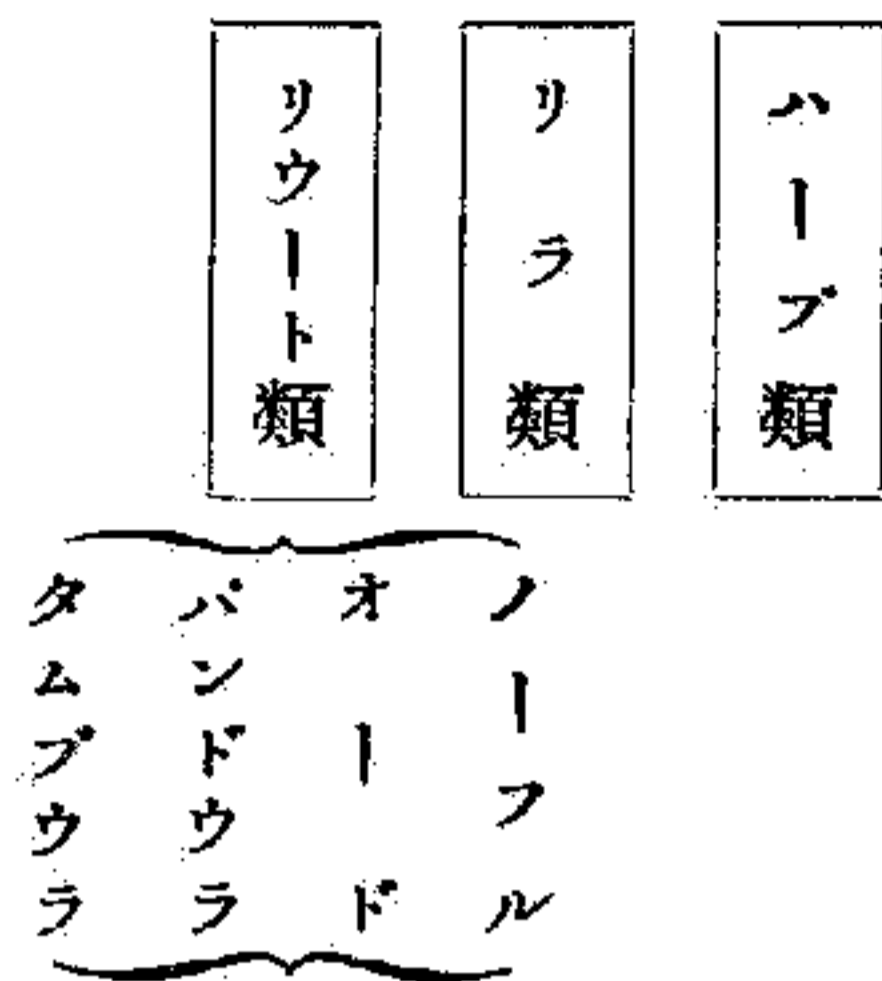
ついで述べ度いと考へたが、私の調査は此點について今少しく研究を積む必要を感ずるので他日に譲る事とする。但しバンジョ、ウカリリは勿論リウート類であつて之が如何なる徑路をもつたかに就いてのみ斷定を避ける次第である。

後編

第一節 樂器系統

本節に於ては前編及本編に於て述べた樂器の系統を略記して讀者の便宜に資したいと思ふ。顧るに今迄述べ來つた處は或は前後し或は重複して讀者の讀書の上に甚だしい混亂を誘致したに違ひない。私の粗雑な頭腦と、あはたゞしい記述が然らしめたのであつて何共申譯ない事である。若しも讀者が次に掲ぐる系統略記を通覽せられ更に前に記した處を繰返し讀まるゝの煩を厭はれなければ今迄の記述も稍秩序的に御諒解下さるであらうと思ふ。

古代絃楽器



第二節 樂器分類

佛國のルネ・ブランクールは其著書中に於て全然構造より見たる分類を掲げた。彼はリュート類の樂器を三種に分ち第一類はリュート、テオルボ、マンドリン等で圓形背、第二類はギターで扁平背の瓢箪型、第三類はシザー、バンドウラ等で扁平背の半卵型とした。

構造より見て敢て不正な分類ではないが完全とは云へない。私は樂器を縦と横とから觀察して左記の如き分類を行ふ。(但し範圍はリュート類の今日使用せられて居るものゝみに限つた。シザーやバンドウラ等で今日も用ひられて居るのはあるが數が少い事であるから省いた)。

一、彈奏の方法よりせる分類

義甲樂器。

マンドリン、クワルテイーノ、マンドラ、マンドロンチエロ、リュート、リ

オラ、マンドローネ、マンドバス、アルチリウート、ドムラ。
指弾樂器。

ギター、テルツギター、ハープギター、アルチキタルラ、キタローネ、バラライカ、バンジヨ、ウカリリ。

(註) 我邦の琵琶や月琴は義甲樂器である。尙バラライカ、ウカリリの二つは稍彈奏法に他と相違がある事を知らねば成らぬ。

二、絃の單復よりせる分類

單絃樂器。

ギター、テルツギター、ハープギター、アルチキタルラ、キタローネ、バラライカ、バンジヨ、ウカリリ、マンドバス。

復絃樂器。

マンドリン、クワルテイーノ、マンドラ、マンドロンチエロ、リウート、リ

オラ、マンドローネ、アルチリウート、ドムラ。

(註) 此内アルチリウート、ハープギターの二つは番外絃を有する事によつて亦他と區別する事が出来る。又マンドローネにも單絃のものがある。

三、形狀よりせる分類

圓形背。

マンドリン、クワルテイーノ、マンドラ、マンドロンチエロ、リウート、リオラ、マンドローネ、ドムラ、リウートギター。

表圖扁平背。

マンドリン、マンドラ、マンドロンチエロ、リウート、マンドローネ、マンドバス、アルチリウート、バンジヨ、リウートギター。

表瓢扁平背。

ギター、ハープギター、テルツギター、アルチキタルラ、キタローネ、ウカ

リリ。

表角扁平背。

パラライカ。

(註) マンドリン、マンドラ、マンドロンチエロ、リウート、マンドローネ等が圓形背と表圓扁平背との兩種に入つて居るのは云ふ迄もなく兩形のものがあるからである。リウートギターが此分類に於て初めて現はれたのは此分類のみに於てギターに含まれるリウートギターをギターから引離す必要があるからである。

此他に音程よりせる分類があるがそれは「マンドリンオーケストラ研究」中に述べた事と殆んど同一であるから省略する。

第三節 將來の同類樂器

此稿を終るに當り將來の同類樂器に就いて豫想を行ふ事は興味深い仕事である。マンドリンは將來に於て構造、絃線等に多少改善の餘地がある様に思ふ。勿論米國ギブソン會社が聲明せる如く扁平背のマンドリンが最進歩せるマンドリンではない。此樂器は飽くまで圓形背で貫くべきだと私は思ふ。唯、絃線は今より一層デリケートな音の出るものを作る必要があり、且その新に出來た絃線の如何によつて多少細部の構造を改めるの要が起らうかと思ふのみである。マンドリンはそれがヴィナッチアやカラチエの最優良なものであり、絃線も優良なものを用ひ、且奏者の技能が優れて居るならば今日と雖其音調は非の打ち處がない。然し若し此の三つの要素の一つでも缺けて居るならば其音調は多少なりとも不純味を帯びるのである。之はどうしても絃線を更に優良ならしめて防がねば成らぬ。同時に樂器其物についてはないが義甲に關して今一層の研究が必要である。今日一般に義甲に就ての研究

が甚足りない事を痛感する。

マンドラ以下のマンドリン系楽器は今日に於て既に出來るだけのものは出來て仕舞つた。今後は此内から必要なものだけが残つて行くに過ぎない。私としてはリオラは不要であると思ふ。マンドバスも將來の生命如何あらうか。

ギターについても絃線は研究を積み重ねば成らない。今日腸線と鋼線とが用ひられ其孰れにも一長一短があるが將來此兩者の優秀な點を兼ね備へた絃線が現はれるのを望むで止まない。

マンドリン系にせよ、又ギター系にせよ、最低音樂器には今一段の工夫を要する。マンドリンオーケストラの最低音部は今や過渡期にあつて確立は近き將來の問題となつて居る。之等は今日の吾々の仕事として充分研究しなければ成らない。

バラライカ、オーケストラに於けるバラライカ、ドムラは此稿では單に其名のみを擧げたに過ぎないが兩者ともアンドレーエフの考案によつて音程の異つた楽器が

存在するのである。バラライカブリーマ、バラライカセクレダ等がそれであつてパスバラライカさへある。此オーケストラはマンドリンオーケストラと對立して將來も存続せしめたい。

リウート類の樂器中、マンドリン、ギター、バラライカ、ドムラ等の系統に屬せずして用ひられるものにバンジョとウカリリとがある。(之等は米國に於てマンドリンオーケストラに結合せられるが暫く例外とする。)

バンジョは若しそれが高踏的に歩む道を興へられるならば將來充分進歩し得る樂器であるが今日の如き邪道に入つて居ては望みがない。ウカリリは將來の生命を危ぶまれる。彼は全然一時的の流行見であるに過ぎず、其和音の可能範圍より見るも決してギターに近接し能ふものでない。

結

冗長な筆を亂雜に走らせた稿も此處で一先づ止める事とする。私には更にトーマス・メーヌやカール・エンヂェルの説を今一層深く研究する必要を感じて居る。將來再び此稿を新にする機會も必ずあらうと考へるから、暫くの猶豫を讀者諸氏に懇願する。尙私の此稿について誤謬を正し異見を提出して下さる方があれば幸之に過ぎない。